報告

タイ王国タマサート大学に滞在して

山田 耕一*

1. タイ王国到着

昨年8月17日午後、タイ王国の首都バンコクに到着。生まれて初めて公務パスポート専用の入国審査窓口を通過すると、前任者の高田孝次先生（長岡技術科学大学機械系）とタマサート大学工学部生産工学科の Supachai 先生が出迎えに来ている。旅行代理店の人間以外に飛行場で出迎えられたことのない私は大変に恐縮し、何度もお礼を繰り返すが、トラブルが心配だからと高田先生は言う。公務パスポート用入国審査窓口の外側で待ちかまえて、代理で出迎えに来たと言葉巧みに騙し、接待を装ってあちこち連れ回し、あとで高額な請求をするという詐欺まがいの事件が過去にあったらしい。

Baggage Claim でスーツケース、パソコンバッグ、それに「JICA 携行機材 山田専門家」と大きく書かれた段ボール箱を受け取り、税関に向かうと、今度は Supachai 先生の出番であった。ODA 予算で購入した携行機材は日本からタイへの援助品であるが、うっかりすると税関で関税を掛けられてしまうのである。心配した通り段ボール箱の中身を細かくチェックされ、いろいろと質問されるが、Supachai 先生の必死の説明で無事通過。卒業式には国王も出席されるというタマサート大学教官のネームバリューがものをいうのだ、との解説に妙に感心する。

タマサート大学では、日本語で「〇〇先生」と呼ぶところを「アジャン〇〇」と呼ぶが、このアジャンという称号、非常に偉い高僧とチュラロンコン大学とタマサート大学の教官だけに許されるものだ、その後聞いた。もちろん、私もこの日からアジャンとなった訳である。

ジャンとなった訳である。

2. タマサート大学工学部拡充計画

今回の滞在は、国際協力事業団(JICA)のタマサート大学工学部拡充計画プロジェクトの専門家として、生産工学科の研究能力向上を支援するのが目的である。任期は1998年8月17日から11月19日にまでの3カ月強。一昨年から昨年にかけて、長岡技術科学大学の中村和男先生と大里有生先生がタイへ行かれた目的と全く同じである。プロジェクトの詳細は昨年の学会誌2月号(Vol.10, No.1, pp.63-66)で大里先生が紹介されたため省くが、工学部には現在、土木工学科、化学工学科、電気工学科、機械工学科、生産工学科の5学科があり、土木工学科と化学工学科をそれぞれ、埼玉大学と東京工業大学が、残りの3学科を長岡技術科学大学が支援している。各大学から専門家が1カ月～1年の任期で派遣されてくるため人の出入りが激しいが、私の滞在期間中、専門家の人数は最も多いときで10名程、12月のアジア大会のために大学閉鎖が近づく11月末には、私を含めて2名という寂しさであった。

写真1: JICA 専門家達との昼食会
(Asian Institute of Technology にて)

* Koichi YAMADA
長岡技術科学大学 計画・経営系

任務の内容は、若手教官達の研究支援、実験室の整備支援、海外留学や研修に関する各種相談、セミナー開催、来年度の支援活動と予算の計画、およびこれらの活動のための各種調整・書類作成といったところであろうか。役所気質の JICA とマイペンライ(気にしない or ケセラセラ)気質のタイ人教官の間で、民間企業経験が長く大学経験の少ない私が調整的な仕事をする訳であるから、その混乱ぶりは容易に想像がつくであろう。もちろん私一人が JICA とタマサート大学の間に入る訳ではなく、プロジェクトリーダーや JICA 調整員にいろいろと相談しながら進めるのだが、私にとって不向きな仕事の一つと改めて実感させられた。

3. 生産工学における知的技術セミナー

タマサート大学滞在中の支援活動の目玉として、9月28日に「生産工学における知的技術セミナー (Seminar on Intelligent Technology in Industrial Engineering)」を企画・開催した。ちょうど9月30日から10月2日にかけて、ベトナムのハロン湾で VJFUZZY 98(ベトナム-日本ファジィシステムシンポジウム)が開催されたため、それに参加する東京工業大学の廣田薫先生と電気通信大学の田野俊一先生にお願いし、バンコクに「自費で」立ち寄り、講演して頂いた。セミナーには、タマサート大学工学部教官と学生、バンコク市内にあるカセサート大学の教官と学生を中心に、当初予定を上回る50名以上の参加者があり、用意した予稿集が

写真2：セミナー後の記念撮影

写真3：チャオプラヤ川の渡し船乗り場にて

不足するほどの盛況となった。

また、日本からは廣田先生と田野先生の他、千葉経済短期大学の中田典規先生、東京工芸大学の荒井良徳先生にも参加して頂き、セミナーの前2日間は私を含めた総勢5人で、王宮(ワット・プラ・ケオ)、水上マーケット、古都アユタヤへのツアーなどのバンコク観光を楽しんだ。

なお、以下に皆様に協力していただいたセミナーのプログラム概要を添付しておく。

■ SEMINAR ON INTELLIGENT TECHNOLOGY IN INDUSTRIAL ENGINEERING

Sponsored and organized by Department of Industrial Engineering, Faculty of Engineering, Thammasat University in cooperation with Japan International Cooperation Agency (JICA)

- 13:00-13:10 Opening address, Dr. Kritdayuth Chompooming, Assistant to Deputy Rector for Operation, Rangsit Campus, Thammasat University
- 13:10-14:10 Survey on industrial applications of Soft computing, Prof. Kaoru HIROTA, Interdisciplinary Graduated School of Science and Engineering, Tokyo Institute of Technology
- 14:10-15:00 Deep Fusion of Computational and Symbolic Intelligent Processing, Dr. Shun'ichi TANO, Graduate School of Information Systems, University of Electro-Communications
- 15:00-15:20 Coffee Break
- 15:20-16:20 Intelligent Technology in Operation Research, Asst. Prof. Dr. Peerayuth Charnsethikul, Head, Department of Industrial Engineering, Faculty of Engineering, Kasetsart University

sity

16:20-16:30 Closing address, Dr. Koichi YAMADA, JICA Expert, Faculty of Engineering, Thammasat University

4. バンコクでの生活

バンコクでは、最初の数日間ホテルに滞在した後、日本で言えば銀座通りとも言えそうな Sukhumvit 通りのすぐ近く、一本路地に入った外人向けアパートに居を構えた。22 階にある家具付きの 2 ベッドルーム&2 バスルームの部屋に、電気・ガス・水道・TV、ベッドメイキング、掃除、ランドリー付きで月 31,100 バーツ(約 12 万円)。景気悪化のため 1 年前より 3,4 割程安くなっていたようだ。ケーブルテレビ代と電話代がこの他にかかる。

大学はバンコク郊外にあって通勤にはレンタカーを使うが、ひどい交通渋滞とあちこちにある一方通行のため、一時滞在者が自分で運転するのは難しい。運転手を雇わざるをえないのだが、1500 cc の車のレンタル料 24,000 バーツに対し、運転手代が 7,000 バーツなのに驚く。私の運転手が会社からもらう給料は 4,500 バーツとのことで、この他に残業代と毎日のチップが彼の収入となる。

タイでは人件費が安いいためか、デパートには店員が、工事現場には労働者が、アパートには警備員が、路上には警察官が、日本の感覚では不必要と思える程たくさんいる。仕事ぶりは焦らずゆっくり。数カ月後にはタマサート大学でアジア大会の開催が予定されていたため毎日のように工事現場を見たが、そのゆったりとした働きぶりには感心(?)する。工事が間に合わないと国の内外でさかんに報道されていたが、それでも工事現場で働いているように見える労働者は、いつ見ても 10 人のうち 2,3 人。最後には帳尻を合わせるのがタイ風と聞いていたものの、12 月のアジア大会が無事開催されるとはなかなか信じる事ができなかった。

たった 3 カ月ではあるが、初めてバンコクで生活して驚いたことは他にも数多くある。スコールの後に発生する洪水(深さ 2~30 cm の水の中をジャブジャブと歩いて帰ったことがある)、世界最悪と言われる交通渋滞(帰宅に 4 時間かかった同僚

もいる)、月に少なくとも一度は起きる停電(1 日以上かけた実験データが停電でパーになった同僚もいる)、アジア大会の工事のため頻繁に不通になる電話・FAX・LAN(1 週間以上、全く外部と連絡を取れなくなったこともある)、小遣い稼ぎに車を止める警察官(理由もわからず 500 バーツ取られた同僚がいる)。

街では渋滞を縫うようにバイクタクシーが走り回り、子供の頃に日本で見た軽三輪自動車がタクシーとして健在である(トクトクと呼ぶ)。しかし一方で、ベンツなどの高級乗用車の数は日本より多いような気がする。ミニスカートに身を包んだ女性がさっそうと歩いているかと思えば、数 10 メートルおきに 4,5 歳の子供達が路上で小銭をねだっている所もある。夜になれば疲れて歩道の上で寝ている子もいる。その回りには汚れた犬達があちこちで死んだように眠っている(死んでいる訳ではない)。

歓楽街に足を運ぶと GO-GO バーがひしめき、中ではタイ東北部から出稼ぎにきた若い女性が水着あるいは全裸でお立ち台の上で踊り、フロアに溢れる。不景気の影響か店の中には客より女性達の方がはるかに多い。タイの有名なリゾート地、サムイ島からモーターボートで 1 時間半の所にあるタオ島でシュノーケリングをしたが、そこで見た美しい珊瑚礁や色とりどりの魚達と、スクンビットで物乞いをする幼い子供達や GO-GO バーの女達とのコントラストが強烈な印象として残っている。

5. おわりに

私はこれまで 1 カ月以上海外で過ごしたことがなく、開発途上国に分類される国に行ったこともなかった。そのため、バンコクでの生活は上述のようになりに強烈な印象となった。おかげでタマサート大学についての記述がほとんどない文章になったが、開発途上国の大学で国際レベルの工学研究をするのは非常に難しいという感想を持った。一つには、工学は実学で、産業と密接に結びついた学問だからである。大学工学部に対してその国の

産業発展に貢献することが求められるなら、大学での研究はその国の産業発展のレベルにかなり引きずられよう。その国の産業がはるか先を行く先進国に追いつくことを第一義にするなら、大学に求められることは、今その国で使うことのできない先端技術の研究ではなく、インフラの整わない環境で如何にして既存技術を実現するかというような泥臭い研究になろう。

もう一つはお金の問題である。実験装置もさることながら、専門書、専門雑誌も途上国の大学にとっては、十分にそろえられないようである。国際会議への出席はほとんど困難に近い。極端に言えば、実験器具やコンピュータがなくても、研究分野は限定されるが研究をすることはできる。少なくとも

も理論研究はできる。しかし、専門の文献なしに先端的な研究をすることはほとんど不可能のように思える。

バンコクの街の印象を、若者風に一言で言うところ「ディープ」ということになろうか。暑くて、工事が多くて、埃っぽくて、とてもきれいとはいえない環境であったが、ちまたに溢れるエネルギーは日本よりはるかに強かったと思う。

[問い合わせ先]

〒 940-2188

新潟県長岡市上富岡町 1603-1

長岡技術科学大学 計画・経営系

山田 耕一

Tel : 0258-47-9359

Fax : 0258-47-9350

Email : yamada@kjs.nagaokaut.ac.jp